

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

SDGs（持続可能な開発目標）に掲げられた目標からもわかるように、現在、人類の抱えるもっとも深刻な問題の1つは、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国等の途上諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として貧困に喘ぎ、教育、保健・衛生・医療、食料・栄養、環境、雇用、平和、人権といったさまざまな面で、基本的なニーズを満たすことができない状態にあります。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な発展の軌道に乗るためには、そこに住んでいる人々自身による開発努力が不可欠です。競争市場の中で民間部門の産業や企業が発展し、付加価値や雇用を創出していくとともに、経済や社会のさまざまな領域で政府が適切な役割を果たしていくことが求められています。市場と政府それぞれの利点をうまく活用する一方、双方の不完全な部分を制度や組織で補完・代替し、途上国は長い時間をかけて、継続的に、自らの力で開発に取り組んでいく必要があります。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国と緊密に協力しながら、資金面、技術面、人材面、貿易面、情報面等の幅広い分野で、積極的に開発問題に関与していかなければ、貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。先進国政府による国際協力、国連等国際機関による国際協力、NGOsなど市民社会による国際協力、さらに、民間企業による資金や技術の移転、貧困層向けBOPビジネス、ソーシャルビジネスを通じての国際協力などが、途上国の経済社会の発展に寄与しています。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関連するさまざまな分野で優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、途上国の経済・社会を分析することのできる高度な専門的知識・技術、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、高度な語学力による国際コミュニケーション能力などが、国際協力に携わる人材にとって必要不可欠な個人的資質・能力であるといえます。複雑な経済・社会の構造を的確に分析し、さまざまな困難な環境の中で、途上国が進むべき方向を見極め、それに合った開発政策や開発戦略を考えることのできる、たくましい精神力と高度な専門能力をもった人材こそが、貧困という人類的な課題を解決するために求められているのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、人類的課題に挑戦する人材を養成する場として設定されました。複数の学部配置されている、国際協力、途上国開発に関連したさまざまな専門科目の学修を中心に、国際的なコミュニケーション能力の強化も進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、さまざまな学部の担当教員と、そしてさまざまな学部の学生と緊密に協力しながら、学部横断的な、学際的な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力を育成していくことを目標としています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジア途上諸国などでの現地調査（「Project-Based Field Work」）を実施し、その結果に基づいて調査報告書を執筆するという実践的な教育を重視しています。

2. 2024 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP 演習A	FLP 演習B	FLP 演習C	総計	実施形態
1	中川 康弘	経済	12	5	3	20	合併(A・B・C)
2	林 光洋	経済	4	5	3	12	単独(A・B・C)
3	平澤 敦	商	12	6	7	25	単独(A・B・C)
4	新原 道信	文	7	5	3	15	単独(A・B・C)
5	山田 恭稔	国際経営	1	3	1	5	合併(A・B・C)
6	中村 俊之	全学連携 教育機構	15	-	3	18	単独(A・C)
7	戸川 正人	全学連携 教育機構	-	3	8	11	単独(B・C)
合 計			51	27	28	106	

3. プログラムスケジュール

5 月 第 1 回部門授業担当者委員会

6 月 第 2 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）

7 月 ガイダンス（一年次生向け）
国際協力プログラム説明会（一年次生向け）
第 3 回部門授業担当者委員会

9 月 国際協力プログラム交流会

10 月 国際協力プログラム説明会（一年次生向け）

11 月 2025 年度募集に伴う選考試験

12 月 第 4 回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

国際協力プログラム説明会（一年次生向け）

実 施 日： 2024 年 7 月 11 日(木)12:40～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパスグローバル館 7 階

実施内容： 履修生によるゼミ紹介

国際協力プログラム交流会

実 施 日： 2024 年 9 月 28 日(土)13:00～16:00

実施場所： 中央大学 多摩キャンパスフォレスト館 F602

実施内容： 研究内容やゼミ活動の紹介

国際協力プログラム説明会（一年次生向け）

実施日： 2024年10月3日(木)17:10～19:30
実施場所： 中央大学 多摩キャンパスグローバル館7階
実施内容： プログラム全体と各ゼミの紹介、ゼミの個別相談会

期末成果報告会

- (1) 実施日： 2024年12月14日(土)9:50～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3453 教室、3454 教室、3455 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告
- (2) 実施日： 2024年12月14日(土)16:20～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室
実施内容： 特別講演
テーマ： 「ストリートチルドレン」からみえる世界
講演者： 工藤 律子 氏（ストリートチルドレンを考える会）

5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、海外産業人材育成協会（HIDA）、国立青少年教育振興機構、日本貿易保険、伊藤忠商事、豊田通商、日本郵船、日本航空（JAL）、全日本空輸（ANA）、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、山九、JTB、エイチ・アイ・エス、三菱東京 UFJ 銀行、三菱 UFJ 信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、りそなホールディングス、横浜銀行、千葉銀行、ゆうちょ銀行、信金中央金庫、東邦銀行、多摩信用金庫、三井住友信託銀行、日本政策金融公庫、大和証券グループ本社、大和証券、岡三証券、第一三共、IHI、カカクコム、キヤノン（Canon）、トヨタ自動車、日産自動車、スズキ、クボタ、NEC、日本 IBM、シスコシステムズ、太平電業、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、ダイキン工業、千代田化工建設、清水建設、本田技研工業、京セラ、矢崎総業、三井物産、大王製紙、大日本印刷、中外製薬、デンカ、船井総合研究所、アビームコンサルティング、KPMG コンサルティング、PwC コンサルティング、フロンティア・マネジメント、エル・ティー・エス、ビジョン・コンサルティング、NJS、ビジョナル、楽天、日本ハム、三菱食品、長瀬産業、国分グループ本社、セブン・イレブン・ジャパン、マザーハウス、LIXIL、システナ、ユニリーバ・ジャパン、損害保険ジャパン、東邦瓦斯、INPEX、日本放送協会（NHK）、テレビ信州、テレビ熊本、読売新聞社、日本経済新聞社、北海道新聞社、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、NTT データ、TIS、フリー（freee）、伊藤忠テクノソリューションズ、ソフトバンク、セコム、ファーストリテイリング、マイナビワークス、パーソルキャリア、CHINTAI、イオンモール、オリエンタルランド、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、上組、郵船ロジスティクス、東京都医学総合研究所、国家・地方公務員（会計検査院、外務省、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、財務省、内閣官房、都庁、県庁、市役所など）、東京大学（大学院農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科）、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、神戸大学大学院国際協力研究科、エジンバラ大学大学院、サセックス大学大学院（開発学研究科、国際教育センター）、ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院、イーストアングリア大学大学院国際開発学研究科、ブラッドフォード大学大学院平和学研究科、ジュネーブ国際・開発研究大学院、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

6. 教育演習活動

(1) 中川 康弘(経済学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

わかりえない、それでも「共生」を志向することとは

<授業の概要>

【A生】

2021年度の国際交流基金調べで海外の日本語学習者数は141の国・地域で約379万人となり、国内でも留学生、技能実習生、移動する子供たちと多様化しています。これまで「外国人に日本語を教えること」と漠然と見られてきた日本語教育は、言葉の使用をめぐる社会的関係、障害やジェンダー、アイデンティティや権力といった広がりを見せています。本演習では国内外における人と人の水平的な関係、交流といった側面に着目します。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。並行して見学調査も行い、現場の実情を体感します。座学と議論、そして現場を往還する知的作業を通じて、4年次に至るまでの各自の興味を掘り起こしていきます。学外の訪問先として、前期は都内の公立中学校夜間学級を訪れ、多文化共生・グローバル社会に対する自らの考えを深めることを検討しています。同時に、方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定します。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査、NGOへの訪問等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。

【B生】

昨年度に続き、ことばや文化を軸に、人と人の水平的な関係、交流といった側面に着目します。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。並行して見学調査も行い、現場の実情を体感します。演習Aで培った、座学と議論、そして現場を往還する知的作業からの学びをさらに精緻化させるべく、各自の興味を掘り起こしていきます。学外の訪問先として、前期は都内の公立中学校夜間学級を訪れ、多文化共生・グローバル社会に対する自らの考えを深めることを検討しています。同時に方法論の基礎について学びつつ、各自が研究課題を設定します。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査、NGOへの訪問等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。

【C生】

異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となって地球規模の諸問題の解決につながるという確信にもとづき、国際協力と日本語教育、多文化共生の意味を学んできた演習A、Bを経て、いよいよ演習Cの本授業において各自のテーマを理論化の俎上にまで高めます。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育、そして言語哲学の観点から「共生」への理解を深めます。並行して見学調査も行い、現場の実情を体感します。演習ABで培った、座学と議論、そして現場を往還する知的作業からの学びをさらに精緻化させるべく、各自の興味を掘り起こしていきます。

後期はアジアの大学で日本語を学ぶ現地学生との共同調査、NGOへの訪問等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考えていきます。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめます。

<活動内容>

前期は『^{フェアネス}公正』を乗り越なす』(太郎次郎社エディタス)を輪読した。「^{フェアネス}公正」とは何か。価値の対立を生む定義づけではなく、対話のあり方や合意形成のしかたに着目し、そこに共生のヒントを得た。後期は『贈与という冒険』(エウレーカ)を読んだ。私たちは物も情報も、知識も制度も文法も「贈与」で存在している。その自覚が消費と経済成長中心の社会のオルタナティブに向かうのではないかと確認した。議論では、気候変動が干ばつ、熱波、サバクトビバッタの大群、洪水やハリケーン被害をもたらし、人々に飢餓をもたらし、紛争が起き、難民が発生するという、国際協力を「点」ではなく「線」で考える必要にも触れた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2024年5月31日(金)

実施都市：東京都荒川区

実施場所：荒川区立第九中学校

実施内容：夜間学級の授業を見学、担当の副校長、主任と意見交換を行った

成果：文部科学省の施策の実情、および7割が外国人生徒であるという現状を知った

実施報告：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2024/06/71618/>

対象演習：A・B

実施日：2024年6月13日(木)／2024年7月8日(月)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁第一本庁舎 総務局人権部人権施策推進課

実施内容：11月に行われるダイバーシティ東京 大学プレゼンコンテスト打ち合わせ

成果：都庁関係者、他大学の学生および教員との会合が持てた

対象演習：A・B・C

実施日：2024年9月9日(月)～2024年9月14日(土)

実施都市：ダナン (ベトナム)

実施場所：ダナン外国語大学・他

実施内容：海外実態調査として、同大学を訪れ、学生・教員にインタビューを行った

成果：現地教員の授業にも参加し、同世代のベトナムの学生たちと交流ができた

対象演習：A・B・C

実施日：2024年9月20日(金)

講演者：木村 茂 氏 (日本国際ボランティアセンター)

演 題：私たちの日常と国際協力の関係

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F505 教室

実施内容：日本のNGOの草分け的存在である同センターの現在の活動について

成果：パレスティナやミャンマー、北朝鮮などでの活動の理解、NGOの難しさを知った

対象演習：A・B・C

実施日：2024年10月24日(木)

実施都市：東京都立川市

実施場所：国立国語研究所

実施内容：同研究所の概要と朝日祥之研究員が行っている言語変種の調査状況について

成果：調査の実態と、各学生のテーマについて丁寧なやり取りができた

実施報告：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2024/10/77137/>

対象演習：A・B

実施日：2024年11月4日(月)

実施都市：栃木県小山市

実施場所：株式会社きぼう国際外語学院

実施内容：同学院主任への聞き取り調査および授業見学（有志2名の参加）

成果：技能実習生を受け入れている現場の状況を理解できた

対象演習：A

実施日：2024年11月5日(火)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）地球ひろば

実施内容：青年海外協力隊の活動について（有志1名の参加）

成果：業務や生活状況について理解するとともに、帰国後の社会還元の意義を知った

対象演習：A・B・C

実施日：2024年11月24日(日)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：東京国際フォーラム

実施内容：ダイバーシティ東京 大学プレゼンコンテスト（有志6名の参加）

成果：5大学で行われ、入賞はなかったが、自分たちの主張を伝えることができた

実施報告：<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2024/11/77822/>

対象演習：A・B

実施日：2024年12月12日(木)

実施都市：栃木県宇都宮市

実施場所：公益財団法人栃木県国際交流協会

実施内容：同協会への聞き取り調査（有志2名の参加）

成果：技能実習生を受け入れている自治体の状況を理解できた

(2) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学 (Development Economics) に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学 (Development Studies) の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2024年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が完全に消え、コロナ前とほぼ同じ状態で授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

2024年度は、開発経済学 (2冊)、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計4冊使用して学習しました。過去2年にならい、2年次のグループ論文の準備を、それまでよりも前倒しにして前期末から始め、夏休みには研究の枠組み作りに本格的に取り組みました。3つの班に分かれて、「インドの地方分権におけるパンチャーヤット・ラージ制度の役割とその課題」、「東南アジア地域の前期中等理数科における教員教育の持続性 ―インドネシアとカンボジアの事例から―」、「サブサハラ・アフリカの水・衛生問題におけるBOP市場に適した条件」、という3編のグループ論文を執筆しました。対面およびオンラインで準備を重ね、12月開催のFLP国際協力プログラム期末成果報告会では、2年生論文の骨格にあたる部分を報告しました。その論文も最終的には2月に完成し、刊行することができました。

さらに、4年生 (演習C) の訪問授業を手伝ったり、ユニセフ・プロジェクトに参加したりしました。前述の通り、コロナ関連の制約もなくなり、生協のフェアトレード・フェアを実施することができました。また、昨年度に続いて、図書館 (国際機関資料室) とともに第2回の「FACT×国際機関資料室 フェアトレード展 (国連SDGs企画展)」という共同企画を開催しました。その他、3年生 (演習B) や4年生 (演習C) が中心になって企画・準備し、実施した特別授業、セミナー、講演会等にも積極的に参加しました。

FLP演習B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2024年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が完全に消え、コロナ前とほぼ同じ状態で、授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

前期も後期も、3コマ連続する本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行ないました。日本語のテキストとして『フィリピン—急成長する若き「大国」—』（井出穰治、2017年）、『なぜ貧しい国はなくなるのか—正しい開発戦略を考える—（第2版）』（大塚啓二郎、2020年）、『ルポ フィリピンの民主主義—ピープルパワー革命からの40年—』（柴田直治、2024年）を、英語のテキストとして *Philippines Economic Update December 2023: Safe Water and Sanitation for All*, (World Bank, 2021年)、*Child Poverty in the Philippines* (UNICEF and Philippine Statistics Authority, 2015年)、*Measuring Progress on Women's Financial Inclusion and Entrepreneurship in the Philippines: Results from a Micro, Small, and Medium-sized Enterprise Survey* (ADB, 2023年) を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。

林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう3年次1年間を使った研究プロジェクトも実施しました。2024年2月、2泊3日のキックオフの合宿で集中討議を行ない、そこで研究対象国をフィリピンに決め、4つのチームを設置し、研究プロジェクトをスタートさせました。

奨学金を獲得することができ、研究計画書の作成やその他の準備もほぼスケジュール通りに進めることができました。オンラインを通じて、フィリピン側にインタビュー調査や質問票調査を実施したり、日本国内の関係する組織・団体を訪ねたりしたうえで、夏休み期間を利用して、2024年8月31日から9月14日までの14泊15日、フィリピンを訪ね、「インフォーマル居住地域における参加型コミュニティ開発プロジェクトの持続性—フィリピンの

事例一)、「フィリピンにおけるサリサリストアの経営改善—店主向け経営教育の役割—」、「ストリートチルドレンの精神的自立と NGO の支援—メトロマニラの事例から—」および「ストリート・ベンダーの社会的地位向上のための組織化アプローチ—メトロマニラの事例から—」というテーマで現地調査を行ないました。

現地調査終了後、経済学部のパレゼンテーション大会では、4つの班が出場し、2つの班が優勝、2つの班が準優勝しました。FLPの期末成果報告会でも、現地調査の結果を含む質の高い研究成果を発表しました。最終的に、英語版および日本語版の論文（合計500ページ超）を刊行することができました、学部3年生の論文としては、質の高いものに仕上がりました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2024年4月20日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中大杉並高校2年生約40人が受講している探究/グローバル・プロジェクトという授業に参加した。FACTメンバーがフェアトレードとFACTの紹介を行ない、その後、グループに分かれている高校生の中に入って、各グループがSDGs関連で1年間かけてどのようなプロジェクトを行なったらいいのかファシリテーターとしてアドバイスを行なった。

成 果：高校生の今後のプロジェクトについて聞くことで、ゼミのメンバーは、自分たちよりも下の世代がどのようなことに興味を持っているのかについて知ることができた。また、高校生の各グループに対してプロジェクトについてアドバイスを行なう中で、これまでゼミで学んできたこと（計画の立て方、テーマの決め方、アポイントメントの取り方、開発経済学に関する知識等）を共有することができ、高校生のプロジェクトの質向上に貢献できた。同時に、高校生に対して簡潔に伝えようとしたことで、ゼミメンバー自身もより理解を深めることができた。

対象演習：B

実施日：2024年6月20日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：認定NPO法人アジア・コミュニティ・センター21（ACC21）

実施内容：フィリピンのストリートチルドレンについてインタビュー調査を実施した。

成 果：ストリートチルドレンに関する研究計画に対してアドバイスをもらった。またストリートチルドレンを支援する上で大切にしていることや、彼らと接する上で気をつけていることなども教えてもらった。フィリピンでストリートチルドレンの支援を実施しているACC21以外の団体についての詳細も明らかになった。

対象演習：B・C

実施日：2024年6月29日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加した。4月にも同じ授業に参加しており、今回は4月からの進捗状況を高校生の全グループに発表してもらった。その後、発表に対して学生側から質問したり、アドバイスしたりした。

成 果：ゼミ学生たちにとっては、高校生の発表の中に初めて知る情報もあり、新たな知識を得ることができた。これまでゼミで学んできたことを活かして高校生にアドバイスを行なうことで、ゼミメンバー自身も学びをより確実にすることができた。

対象演習：B

実施日：2024年7月5日(金)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：上智大学 目白聖母キャンパス（岡本 菜穂子 先生）

実施内容：ストリートチルドレンへの調査方法についてインタビュー調査を実施した。

成果：フィリピンの現地調査のインタビューで使用する予定の質問票の項目についてアドバイスもらった。実際にストリートチルドレンに使用したことのある質問票を見せていただき、質問する上で配慮すべきことを教えてもらった。

対象演習：B

実施日：2024年7月20日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：ストリートチルドレンを考える会（コミュニティフラット馬橋）

実施内容：ストリートチルドレンを考える会がフィリピンやメキシコで行なっているストリートチルドレンへの支援方法や彼らへの接し方についてインタビューを行なった。

成果：ストリートチルドレン班の研究内容や作成途上の質問票が現地の状況に則したものになっているのかという点を中心にアドバイスをもらい、彼らの研究の改善につながった。

対象演習：B

実施日：2024年8月31日(土)～2024年9月14日(土)

実施都市：マニラ（フィリピン）

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）Philippines Office・他

実施内容：フィリピンで現地調査を実施した。その最終段階で、JICA フィリピン事務所では現地調査の結果を報告した。

成果：ストリート・ベンダー班、ストリートチルドレン班、サリサリストア班、コミュニティ開発班がそれぞれのテーマにもとづき、調査対象とした機関、団体に事前にメールでアポイントメントをとったうえで訪問し、質問票・インタビュー調査を実施した。今まで国内やオンラインでの調査を進めてきたが、そこでは得ることのできなかった情報を各機関・団体に実際に足を運び、お話を聞かせてもらうことで、研究をより有意義なものとすることができた。また、日程の最後には JICA のフィリピン事務所に訪問し、現地調査で得られたことの総まとめと発表、それに対する職員の方からのフィードバックをいただくことができた。

対象演習：B

実施日：2024年9月2日(月)

講演者：Redento B, Recio 先生（フィリピン大学/メルボルン大学）

演題：インフォーマル部門における街頭販売（ストリートベンディング）、輸送、決済の空間倫理

実施都市：ケソン（フィリピン）

実施施設：フィリピン大学 ディリマン校

実施内容：上記演題の講演をしてもらった。

成果：フィリピンのストリート・ベンダーの概況とマニラ周辺のストリート・ベンダーの詳細について講演してもらった。近年のストリート・ベンダーの変化について詳しい情報を提供してもらい、最新の現地の情報を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2024年9月3日(火)

講演者：Carlene Perpetua Pilar-Arceo 先生（フィリピン大学 ディリマン校）

演題：フィリピンの経済発展

実施都市：ケソン（フィリピン）

実施施設：フィリピン大学 ディリマン校

実施内容：上記演題の講演をしてもらった。

成果：フィリピンの貧困、格差、インフォーマル・セクターについて講演をしてもらい研究プロジェクトの全体のテーマでもあるそれらについて学びを深めることができた。講演で得た知識やアドバイスをもとに研究内容や質問票の内容を改善して、現地調査を実施することにつながった。

対象演習：B

実施日：2024年9月10日(火)

講演者：ARLENE CHRISTY D. LUSTERIO 氏（Tao-Pilipinas）

演題：ルパン・アレンダ地域におけるコミュニティ開発について

実施都市：ケソン（フィリピン）

実施施設：Tao-Pilipinas ケソン事務所

実施内容：上記演題の講演をしてもらった。

成果：インフォーマル・セクターのルパン・アレンダ地域で行なわれているコミュニティ参加型開発を Tao-Pilipinas はどのように支援しているのかについて詳しく講演をもらった。Tao-Pilipinas は住民と協働し、住居環境の問題解決に取り組んでいることが明らかになった。具体的には、食糧不足対策のための都市菜園、夜間の防犯対策のためのソーラー・ストリート・ライトの設置のプロジェクトを実施していることがわかった。

対象演習：B

実施日：2024年10月16日(水)

実施都市：東京都文京区

実施場所：認定 NP0 法人アジア・コミュニティ・センター21（ACC21）

実施内容：現地調査への協力のお礼および結果報告を行なった。

成果：現地調査の支援に対するお礼および調査結果の報告を行なった。フィリピンで実施したアンケート調査の分析結果にもとづいて、フィリピンのストリートチルドレンに対して行なわれている支援が子どもたちの自立に貢献していることを発表し、それに対するコメントをもらうことができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年10月18日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：中央大学附属横浜高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：高校2年生の希望者32人を対象に、彼らの修学旅行先である、シンガポールと、マレーシアの情報やクイズを交えつつ、3年次のフィリピンでの現地調査で得た結果をもとに「フィリピンの食料不安」というテーマで90分間の授業を行なった。クイズを冒頭に行なったことで、生徒たちにより授業への関心をもってもらうことができた。グループワークの際も話し合いが活発に行なわれており、授業を楽しんでもらうことができた。

対象演習：B

実施日：2024年10月19日(土)

実施都市：愛知県名古屋市

実施場所：認定NPO法人アイキャン

実施内容：現地調査への協力のお礼および結果報告を行なった。

成果：現地調査への支援のお礼と調査結果の報告を行ない、コメントをもらった。また現地調査時にインタビューにも協力してもらった元ストリートチルドレンとその支援者が日本に来日するイベントを開催していたので、ゼミ学生が彼らと交流することができた。

対象演習：B

実施日：2024年10月23日(水)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：上智大学 四谷キャンパス（岡本 菜穂子 先生）

実施内容：現地調査への協力のお礼および結果報告を行なった。

成果：現地調査への支援のお礼と調査結果の報告を行ない、コメントをもらった。論文に載せる必要のある部分が明らかになった。岡本先生の分析手法について学ぶことができた。論文の研究の限界というパートに載せるべき情報についてもアドバイスをもらうことができた。

対象演習：B

実施日：2024年10月30日(水)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：杉並区阿佐ヶ谷地域区民センター

実施内容：現地調査への協力のお礼および結果報告を行なった。

成果：現地調査前にも研究に対してアドバイスをもらった NGO「ストリートチルドレンを考える会」を再訪問し、支援に対するお礼と現地調査の結果報告を行なった。また、プレゼンテーション大会へのアドバイスももらうことができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年10月31日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：高校1年生162人を対象に、100分間（50分間×2コマ）の授業を行なった。1コマ目は、全体に対し、大学のゼミをはじめとする学びの紹介やフィリピンの食料不安に関する講義を行なった。2コマ目は、クラスに分かれ、生徒にグループワークおよびその発表をしてもらった。高校生に途上国の食料問題を自分事を感じてもらうことができたと思われる。ゼミ学生も食料問題についてあらためて知識を整理することにつながった。

対象演習：B

実施日：2024年11月5日(火)

実施都市：福岡県北九州市

実施場所：北九州市立大学（吉田 舞 先生）

実施内容：研究結果のプレゼンテーションおよび情報交換会

成果：フィリピンのストリート・ベンダーに詳しい吉田先生を訪ね、現地調査で得た結果を吉田先生と吉田ゼミの学生に対してプレゼンテーションし、そのフィードバックをもらった。当該分野の専門家からの詳しいアドバイスやコメントを受け、

ストリート・ベンダー組織のローカリティについてより深い知見を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2024年11月7日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：認定NPO法人アジア・コミュニティ・センター21 (ACC21)

実施内容：現地調査への協力のお礼および結果報告を行なった。

成果：現地調査の支援に対するお礼および調査結果の報告を行なった。インフォーマル居住地域における参加型コミュニティ開発の持続性に必要な要素として、アカウンタビリティ（説明責任）、オーナーシップ、住民のニーズの把握が重要であることが、ルパン・アレンダ地域やエラップ地域の調査を通じて明らかになったことを発表した。さらに、共通のニーズが存在することも研究結果として報告した。学生たちの報告に対して、多くのフィードバックを得ることができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年11月30日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加し、高校生の成果に対して講評した。

成果：ゼミ学生たちにとって3回目で最終回の訪問となり、高校生たちの研究成果に対して講評を行なった。高校生たちは11グループあり、国際問題、多様性、在日外国人の日本語教育、多文化共生などさまざまなテーマを扱っていて、ゼミ学生にとっても学びの機会になった。

対象演習：B・C

実施日：2025年1月14日(火)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属高等学校

実施内容：中央大学附属高等学校の2年生の授業（SDGs）に参加し、コメントや情報を提供した。

成果：簡易ろ過装置の製作や、日本アマガエルの保護、学校の排水溝詰まりの改善等といった、林ゼミでは扱ってこなかったテーマでプロジェクトを行なっている生徒もおり、学生たちはコメントを提供したが、同時に新たな知識を多く得ることもできた。

FLP演習C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2024年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が完全に消え、コロナ前とほぼ同じ状態で、授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

前期も後期も、連続コマの本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行ないました。4年生（演習C）のメイン・タスクである修了論文については、しっかりとした研究計画書の作成と幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。最終的に、メンバー全員が修了論文を書きあげることができました。

修了論文の執筆に加えて、先輩たちから受け継がれ、伝統になっている高校向けの訪問授業プロジェクトとユニセフとのジョイント・プロジェクトを実施することができました。また、その流れの中で、中大杉並高校から依頼があり、本年度、同校の探究授業の時間に実施したグローバル・プロジェクトのために、2024年4月から11月にかけて3回、ゼミ学生たちが高校生に対して授業をしたり、最終の成果発表の際に講評をしました。加えて、2025年1月、中大附属高校のSDGsをテーマにした授業に参加し、高校生の研究成果に対してコメントを提供しました。

2024年6月から11月に、高校6校（浦和学院高校、東京純心女子高校、中大附属高校、中大杉並高校、中大高校、中大横浜高校）を対象にして、対面による訪問授業/模擬授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした途上国の開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。また、日本ユニセフ協会と連携して、10月から12月にかけて、共同講演会および募金活動を実施しました。

前年度までの活動で得た知識・経験や本年度の活動の結果を、訪問授業、ユニセフとの共同講演会、FLP国際協力プログラム期末成果報告会等の中で発表しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2024年4月20日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中大杉並高校2年生約40人が受講している探究/グローバル・プロジェクトという授業に参加した。FACTメンバーがフェアトレードとFACTの紹介を行ない、その後、グループに分かれている高校生の中に入って、各グループがSDGs関連で1年間かけてどのようなプロジェクトを行なったらいいのかファシリテーターとしてアドバイスを行なった。

成果：高校生の今後のプロジェクトについて聞くことで、ゼミのメンバーは、自分たちよりも下の世代がどのようなことに興味を持っているのかについて知ることができた。また、高校生の各グループに対してプロジェクトについてアドバイスを行なう中で、これまでゼミで学んできたこと（計画の立て方、テーマの決め方、アポイントメントの取り方、開発経済学に関する知識等）を共有することができ、高校生のプロジェクトの質向上に貢献できた。同時に、高校生に対して簡潔に伝えようとしたことで、ゼミメンバー自身もより理解を深めることができた。

対象演習：C

実施日：2024年6月27日(木)

実施都市：東京都港区

実施場所：公益財団法人日本ユニセフ協会

実施内容：日本ユニセフ協会の本部で2024年度のプロジェクトの打ち合わせを行なった。

成果：双方の顔合わせを行ない、2024年度の活動の内容や方向性について具体的な話し合いを行なうことができた。特に、2023年度の林ゼミでの研究成果を活かし、日本ユニセフ協会の活動とどのようにつなげていくかについて検討を進めることができた。共同講演会については、テーマ設定に関して意見を交換し、ゼミ生が主体となって準備を進める方向性を確認した。今後のオンラインミーティングに向けて、事前準備の分担を明確にし、円滑にプロジェクトを進めるためのスケジュールを設定することができた。今回の対面での打ち合わせにより、双方の理解が深まり、今後の協力体制をより強固なものにする基盤を築くことができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年6月29日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加した。4月にも同じ授業に参加しており、今回は4月からの進捗状況を高校生の全グループに発表してもらった。その後、発表に対して学生側から質問したり、アドバイスしたりした。

成果：ゼミ学生たちにとっては、高校生の発表の中に初めて知る情報もあり、新たな知識を得ることができた。これまでゼミで学んできたことを活かして高校生にアドバイスを行なうことで、ゼミメンバー自身も学びをより確実にすることができた。

対象演習：C

実施日：2024年7月13日(土)

実施都市：東京都八王子市

実施場所：東京純心女子高等学校

実施内容：高校1年生の希望者60人を対象に3年次のフィリピンでの現地調査で得た結果

をもとに、「フィリピンの食料不安」というテーマで 80 分間の授業を行なった。
成 果：授業の中にグループワークのパートを設け、ゼミ学生が各グループに 1 人ずつ入りファシリテーターの役割を担った。ファシリテートする中で、ゼミ学生たちは異なる年代とのコミュニケーションの取りかたを学ぶことができた。

対象演習：C

実 施 日：2024 年 7 月 18 日(木)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：株式会社 FRUTA FRUTA

実施内容：3 年次の研究で協力してもらった「株式会社 FRUTA FRUTA」を訪問し、冊子体論文を手交し、現地調査で得たアグロフォレストリーに関する調査結果を報告した。

成 果：2023 年度に実施したゼミ学生たちのフィリピンにおけるアグロフォレストリーに関する研究結果を報告し、それをベースにしてアグロフォレストリーに関する議論を行なうことができた。

対象演習：C

実 施 日：2024 年 9 月 27 日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：中央大学附属横浜高等学校

実施内容：10 月 18 日に実施する訪問授業の打ち合わせを行なった。訪問授業の受入担当の先生と授業当日のスケジュールや授業内容、実施教室の最終確認を行なった。

成 果：打ち合わせを対面で実施することにより、担当の先生との円滑なやり取りができただけでなく、学生の代表者が事前に現地を訪問することで、当日のスムーズな移動や授業運営にもつながった。

対象演習：C

実 施 日：2024 年 10 月 9 日(水)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属高等学校

実施内容：高校 2 年生の希望者 35 人を対象に 50 分間の授業を行なった。

成 果：「ゼミナールとはどのようなものか」というような説明から始まり、3 年次のフィリピンでの現地調査で得た結果をもとに、「フィリピンの食料不安」というテーマで授業を行なった。グループワークも実施し、グループワーク終了後はグループの意見を発表してもらった。授業実施後のアンケートでも「充実していた」という回答が多かったので、高校生にゼミ学生たちの経験や知識をうまく伝えることができたと思われる。訪問授業により、教えることを通じて、学生たちは自身の学びにつなげることができた。

対象演習：C

実 施 日：2024 年 10 月 17 日(木)

実施都市：東京都立川市

実施場所：立川駅北口

実施内容：立川駅北口にて、2024 年度 1 回目のユニセフ街頭募金を実施した。

成 果：立川駅北口の街頭で「途上国の栄養不良の子どもたちのためにご協力お願いします！」と大きな声で呼びかけ、子どもたちから年配の方々まで幅広い年代の方々に支援してもらうことができた。

対象演習：B・C

実 施 日：2024 年 10 月 18 日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：中央大学附属横浜高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成 果：高校2年生の希望者32人を対象に、彼らの修学旅行先である、シンガポールと、マレーシアの情報やクイズを交えつつ、3年次のフィリピンでの現地調査で得た結果をもとに「フィリピンの食料不安」というテーマで90分間の授業を行なった。クイズを冒頭に行なったことで、生徒たちにより授業への関心をもってもらうことができた。グループワークの際も話し合いが活発に行なわれており、授業を楽しんでもらうことができた。

対象演習：C

実施日：2024年10月25日(金)

実施都市：東京都多摩市

実施場所：小田急多摩センター駅西口

実施内容：多摩センターの駅前広場にて、2回目のユニセフ募金活動を実施した。

成 果：当日は、例年を上回る募金額を集めることができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年10月31日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：中央大学高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成 果：高校1年生162人を対象に100分間(50分間×2コマ)の授業を行なった。1コマ目は、全体に対し、大学のゼミをはじめとする学びの紹介やフィリピンの食料不安に関する講義を行なった。2コマ目は、クラスに分かれ、生徒にグループワークおよびその発表をしてもらった。高校生に途上国の食料問題を自分事を感じてもらうことができたと思われる。ゼミ学生も食料問題についてあらためて知識を整理することにつながった。

対象演習：C

実施日：2024年11月8日(金)

実施都市：東京都多摩市

実施場所：小田急多摩センター駅西口

実施内容：多摩センターの駅前広場にて、3回目のユニセフ募金活動を実施した。

成 果：これまでの募金活動の反省点を活かし、通行人の方々を配慮して声掛けを行なった。その結果、例年を上回る募金額を集めることができた。募金の全額を日本ユニセフ協会に振り込んだ。

対象演習：C

実施日：2024年11月10日(日)

実施都市：東京都町田市

実施場所：木曽森野コミュニティセンター

実施内容：コミュニティ防災をテーマにした修了研究プロジェクトのフィールド調査のため日本赤十字社東京都支部の救護課の職員の方々に協力してもらい、赤十字防災セミナーに同席させてもらい、参加していたメンバーの住民にインタビューおよびアンケート調査を行なった。

成 果：参加者の共同体意識の程度とコミュニティ防災の能力を確認することができた。コミュニティで活動するためのスペースや高齢化が共同体意識やコミュニティ防災力に関係していることを明らかにすることができた。

対象演習：C

実施日：2024年11月21日(木)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：高校生に対して授業を行なった。

成果：高校1～3年生の希望者23人を対象に、3年次のフィリピンでの現地調査で得た結果をもとに、「フィリピンの食料不安」というテーマで100分間の授業を行なった。グループワークも実施し、グループの意見を発表してもらった。生徒たちからは、新しい視点からの意見も多く、ゼミ学生たちが勉強する機会になった。訪問授業の回数を重ねることによりわかりやすい表現を心掛けるなどの工夫を重ねた結果、訪問授業の最終回としてふさわしいものになった。

対象演習：B・C

実施日：2024年11月30日(土)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：中央大学杉並高等学校

実施内容：中央大学杉並高等学校の授業（探究/グローバル・プロジェクト）に参加し、高校生の成果に対して講評した。

成果：ゼミ学生たちにとって3回目で最終回の訪問となり、高校生たちの研究成果に対して講評を行なった。高校生たちは11グループあり、国際問題、多様性、在日外国人の日本語教育、多文化共生などさまざまなテーマを扱っていて、ゼミ学生にとっても学びの機会になった。

対象演習：C

実施日：2024年12月8日(日)

実施都市：東京都町田市

実施場所：境町会会館

実施内容：コミュニティ防災をテーマにした修了研究プロジェクトのフィールド調査のため日本赤十字社東京都支部の救護課の職員の方々に協力してもらい、赤十字防災セミナーに同席させてもらい、参加していたメンバーの住民にインタビューおよびアンケート調査を行なった。

成果：共同体意識の程度とコミュニティ防災の能力に、コミュニティのメンバーのオーナーシップが関係していることを明らかにすることができた。小さな子どもから高齢者までを対象にしたイベント開催がオーナーシップの醸成に寄与していることを確認できた。

対象演習：C

実施日：2024年12月15日(日)

実施都市：東京都立川市

実施場所：若葉会館第一・第二集会室

実施内容：コミュニティ防災をテーマにした修了研究プロジェクトのフィールド調査のため日本赤十字社東京都支部の救護課の職員の方々に協力してもらい、赤十字防災セミナーに同席させてもらい、参加していたメンバーの住民にインタビューおよびアンケート調査を行なった。

成果：立川市若葉町、町田市境町、町田市日東住宅街の3地域を対象にした調査から、共同体意識の程度とコミュニティ防災の能力にどのような要素がどのように作用しているのかに関する情報を得ることができ、修了研究プロジェクトにとっての重要な材料を集めることができた。

対象演習：C

実施日：2024年12月21日(土)

実施都市：神奈川県逗子市

実施場所：逗子文化プラザ市民交流センター

実施内容：フェアトレードタウンをテーマにした修了研究プロジェクトのフィールド調査のため、逗子フェアトレードタウンの会に質問票・インタビューを実施した。

成果：フェアトレードを普及するためのイベントを誰がどのように計画し、実行しているのかについて知ることができた。市の広報は市民からの信頼性が高く、平等に拡散することができるため、フェアトレードを普及するうえで重要な存在であるということがわかった。インタビュー後の会議にも参加することで、どのような雰囲気フェアトレードタウンの会が運営されているのか知ることができ、オンラインでは得られない経験をすることができた。

対象演習：B・C

実施日：2025年1月14日(火)

実施都市：東京都小金井市

実施場所：中央大学附属高等学校

実施内容：中央大学附属高等学校の2年生の授業（SDGs）に参加し、コメントや情報を提供した。

成果：簡易ろ過装置の製作や、日本アマガエルの保護、学校の排水溝詰まりの改善等といった、林ゼミでは扱ってこなかったテーマでプロジェクトを行なっている生徒もおり、学生たちはコメントを提供したが、同時に新たな知識を多く得ることもできた。

(3) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 A 平澤敦ゼミは、本年度3つのグループに分かれて、研究を進めた。

研究テーマは、人材育成、グリーンボンド、オーバーツーリズムである。

シンガポールにて、シンガポール国立大学をはじめ、関係各所にヒアリングを実施した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2024年8月24日(土)～2024年8月30日(金)

実施都市：シンガポール (シンガポール)

実施場所：独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO) シンガポール事務所・他

実施内容：研究テーマに関して、ヒアリングを実施するにあたり、有益な示唆が得られうる機関を選択した。

成果：ヒアリングの内容を反映させた研究成果は、期末成果報告会にて公表した。

対象演習：A

実施日：2024年11月29日(金)～2024年12月1日(日)

実施都市：大阪府茨木市

実施場所：立命館大学 大阪いばらきキャンパス

実施内容：武蔵大学と立命館大学との合同ゼミ (7月は中間報告会)

成果：3グループすべてが発表し、期末成果報告会に向けての貴重なご意見を他大学の先生、ゼミ生からいただいた。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：石井 由紀子 氏 (フリーアナウンサー)

演題：台湾の「今」を食べ物や文化・音楽から切り取る

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：台湾の文化や最新事情等につき詳細な解説をいただき、課題解決型のワークショップを、講義終了後行った。

成果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：藤森 香衣 氏 (NPO 法人 C-ribbons)

演題：生きるということ (今～未来を逆算する) は何か。

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：韓国事情、さらには、今後どのような仕事につき、いかに持続的に取り組んでいくかにつき、解説いただいた。

成 果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

FLP 演習 B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP 演習 B 平澤敦ゼミは、本年度、台湾地震と能登地震の比較を中心とした地震保険・防災についての国際比較を研究テーマとした。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2024年9月8日(日)～2024年9月13日(金)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：新安東京海上日動 台湾支部・他

実施内容：台湾地震については、詳細な情報をえることができないため、その点を踏まえて事前に質問表を送付し、台湾における地震保険制度について詳細な解説を行っていただいた。

成果：質疑応答の時間も十分に設けていただき、わが国との共通点・相違点を詳しくしることができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：石井 由紀子 氏（フリーアナウンサー）

演題：台湾の「今」を食べ物や文化・音楽から切り取る

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：台湾の文化や最新事情等につき詳細な解説をいただき、課題解決型のワークショップを、講義終了後行った。

成果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：藤森 香衣 氏（NPO 法人 C-ribbons）

演題：生きるということ（今～未来を逆算する）は何か。

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：韓国事情、さらには、今後どのような仕事につき、いかに持続的に取り組んでいくかにつき、解説いただいた。

成果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

FLP演習C

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

FLP演習C平澤敦ゼミは、本年度、アジア地域のフードバンク活用におけるFood Wasteの考察を研究テーマとして、研究を進めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2024年10月15日(火)～2024年10月19日(土)

実施都市：香港（中国）

実施場所：独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO） 香港事務所、Feeding Hong Kong・他

実施内容：Feeding Hong Kongにて、香港のfood loss and wasteの取り組みについてレクチャーを受けることができ、食品の選別および保管場所も見学することができた。

成果：香港で得た知見、ならびにその後国内でのマルハニチロのヒアリングも含め、その成果については、期末成果報告会にて公表した。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：石井 由紀子 氏（フリーアナウンサー）

演題：台湾の「今」を食べ物や文化・音楽から切り取る

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：台湾の文化や最新事情等につき詳細な解説をいただき、課題解決型のワークショップを、講義終了後行った。

成果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月6日(月)

講演者：藤森 香衣 氏（NPO 法人C-ribbons）

演題：生きるということ（今～未来を逆算する）は何か。

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F504 教室

実施内容：韓国事情、さらには、今後どのような仕事につき、いかに持続的に取り組んで行くかにつき、解説いただいた。

成果：お二方の講義終了後、活発な質疑応答がなされ、異文化体験の重要性を再認識できる貴重な機会となった。

(4) 新原 道信 (文学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学びました。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、台湾・高尾への留学から帰国したC生の大きな貢献がありました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきました。

台湾を 2024 年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。台湾では台北と台南を主要なフィールド

として、テーマごとに ABC 生合同の班に分かれてフィールドワークを行いました。後期には
期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。
期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書（総頁数 124 頁）を、全員の協力でとりま
とめました。

A 生は、BC 生や院生からのアドバイスにもとづき、台湾調査実施後の 2024 年度後期からゼ
ミの運営を担い、来年度のマレーシア調査を実現させるため、春休み期間の課題、現地へ行
くための準備等を怠らずに進めています。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実 施 日：2024 年 8 月 23 日(金)～2024 年 8 月 27 日(火)

実施都市：台北市・台南市（台湾）

実施場所：国立台湾博物館・安平古堡・烏來泰雅民族博物館・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエ
スション〉を定めてフィールドワークを実施した。

成 果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践する
ことにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with
heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び』

第 1 編「コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び」

新原ゼミの考える国際協力

今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

福祉班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

多文化共生班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

アイデンティティ班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

民主主義班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

今年度の総括及び振り返り

FLP演習B

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学びました。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中で留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、台湾・高尾への留学から帰国したC生の大きな貢献がありました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していきました。

B生が中心となり、台湾を2024年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。台湾では台北と台南を主要なフィールドとして、テーマごとにABC生合同の班に分かれてフィールドワークを行い

ました。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書（総頁数 124 頁）を、全員の協力でとりまとめました。

ゼミの運営を中心的に担った B 生は、C 生や院生からのアドバイスにもとづき、台湾調査実施を計画立案・リードしました。2024 年度後期からゼミの運営を担うようになった A 生にアドバイスし、来年度のマレーシア調査を実現させるため、春休み期間の課題、現地へ行くための準備等を怠らずに進めています。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実施日：2024 年 8 月 23 日(金)～2024 年 8 月 27 日(火)

実施都市：台北市・台南市（台湾）

実施場所：国立台湾博物館・安平古堡・烏來泰雅民族博物館・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエストション〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び』

第 1 編「コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び」

新原ゼミの考える国際協力

今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

福祉班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

多文化共生班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

アイデンティティ班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

民主主義班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

今年度の総括及び振り返り

FLP演習C

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学びました。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えしました。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめました。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していききました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。今年度も、台湾・高尾への留学から帰国したC生の大きな貢献がありました。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していききました。

C生のアドバイスにもとづき、台湾を2024年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意し、事前調査と事後調査に力をいれました。全ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でフィールドワークを実施しました。台湾では台北と台南を主要なフィールドとして、テーマごとにABC生合同の班に分かれてフィールドワー

クを行いました。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書（総頁数 124 頁）を、全員の協力でとりまとめました。

AB 生へのアドバイスを中心的に担った C 生は、B 生の台湾調査の計画立案・実施をサポートしました。2024 年度後期からゼミの運営を担うようになった A 生にもアドバイスし、来年度のマレーシア調査についても知見を提供してくれています。

<実態調査>

対象演習：A・B・C

実施日：2024 年 8 月 23 日(金)～2024 年 8 月 27 日(火)

実施都市：台北市・台南市（台湾）

実施場所：国立台湾博物館・安平古堡・烏來泰雅民族博物館・他

実施内容：ABC 生合同の班をテーマごとに複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエストション〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）” の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

『コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び』

第 1 編「コロナ後の再出発：台湾フィールドワークの実践と学び」

新原ゼミの考える国際協力

今年度の歩み

第 2 編 各班調査報告

福祉班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

多文化共生班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

アイデンティティ班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

民主主義班

第 1 章 班のテーマ

第 2 章 個人研究

第 3 章 まとめと展望

今年度の総括及び振り返り

(5) 山田 恭稔 (国際経営学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

開発社会学を通して東南アジアを捉える

<授業の概要>

開発社会学の視点から、東南アジア地域での貧困や格差に関連する多岐にわたる開発課題あるいは社会問題に対する政策や国際協力について、地域社会を軸に研究する。また、東南アジア諸国が抱える開発課題や社会問題に対する政策および試み、ならびにそれらが地域社会にもたらした影響について学びを深めながら、開発社会学の視点や考え方の基礎を批判的思考を通して習得する。

本演習 ABC は、ゼミ生が専門知識だけではなく、発表や討議をも含んだチームワークの経験を積み、協調性、自己管理能力を修得し、また、フィールドワークに基づいたレポートや演習論文の作成などを通じ、総合的な学習体験と知的複眼思考力を修得することに関わる。

<活動内容>

山田ゼミでは、輪読と、グループ研究または修了研究という相互補完的に作用する2つの活動の両輪を並行させながら、ゼミ生たちが主体となった研究活動を進めました。全回ともほぼ全員が出席する形で対面形式による授業を進めることができました。そして、このことは、学年を超えた親睦と協力が深まることにつながり、さらに、積極的な討議や活発な意見交換、チームワークに基づく多岐にわたった有意義なゼミ活動を生み出す礎にもなりました。

輪読では、国際協力や国際開発に関してのみならず、東南アジアの社会や政治に関する文献から学びました。東南アジアに関する輪読では、特に、「人間の安全保障」、およびジェンダーの視点に関連した研究に触れました。

ゼミ生たち自らの研究として、演習Aおよび演習Bでは、A・Bゼミ生合同チームによりタイの女性住民組織とエンパワーメントをテーマにグループ研究が行なわれました。年度始めより試行錯誤を重ねながら研究の枠組み作りに取り組み、その精度を徐々に上げる一方で、8月末からのタイでの実態調査の準備も進めました。一方、演習Cでは、カンボジアに進出した日系の中小企業によるカンボジア人雇用者との関わりをテーマに修了研究が行なわれました。当該のCゼミ生は、弊ゼミでのこれまでの活動を通して得た経験を活かしながら、11月にインタビューならびに実態把握のための現地調査も実施しました。A・B・Cゼミ生が実施したこれらのインタビューや実態調査からは、開発や国際協力の現場に実際に携わったり、実態を深く知る人々からの話や言葉に触れる貴重な機会を得ることができました。そして、それらの結果をグループ研究あるいは修了研究という形で論文にまとめ上げることができました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2024年6月10日(月)

講演者：Sirikan Limpaka 氏 (Chiang Mai University)

演題：Current Situation of Women in Thailand

実施施設：中央大学 多摩キャンパス FG605 教室

実施内容：タイにおける女性の社会的な立場や役割に関し、都市部と農村部での違いを織り交ぜながら説明がなされた。講演では、一方的な説明ではなく、弊ゼミ生の理解に寄り添いかつ疑問に答える双方向形式が採られ、これらの説明がなされた。

成果：A・Bゼミ生が研究テーマとして関心を持っていたタイにおける女性の社会的役割、地位、立場に関して、文献を読み解くだけではわかり難い現状を、現地からの生の声として、数々の具体例とともにうかがうことができました。この結果、ゼミ生たちはタイ女性の社会的立場について理解を深めることができました。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年8月28日(水)～2024年9月3日(火)

実施都市：バンコクおよびプラチンブリー県ブラジャンタカーム郡（タイ）

実施施設：RECOFTC (The Regional Community Forestry Training Center for Asia and the Pacific)・他

実施内容：WMP (Women and Men Progressive Movement Foundation)、AJWS (American Jewish World Service)、APSW (Association for the Promotion of the Status of Women) での聞き取り調査。山田禎夫氏および RECOFTC による講演ならびに質疑応答。Dong Bang タンボンと Pho Ngam タンボンでの踏査、聞き取り調査、および交流。

成果：WMP、AJWS、APSW での聞き取り調査では、タイの女性たちが抱えている課題、そして、それらの課題に対する当該 NGO の取り組みについて知ることができました。さらに、それらの活動を行なっている NGO の職員が持つ女性のエンパワーメントに関する考えについても知ることができました。(2 件の講演について別途後述。) 一方、ブラジャンタカーム郡内の両タンボンでは、「まちづくり」における自治体の役割、様々な女性組織の活動と成果、村の貯蓄組合の役割と成果、地域産業などを知ることができました。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年8月29日(木)

講演者：山田 禎夫 氏（元滋賀県甲良町役場）

演 題：タイの地方行政および地方自治制度と「まちづくり」について

実施都市：バンコク（タイ）

実施施設：Justice Hotel 会議室

実施内容：タイの地方行政や地方自治に関して、日本の地方自治体と比較しながら説明がなされた。特に、講師が滋賀県甲良町役場職員としてかつて携わった「まちづくり」と、JICA 専門家として以前協力した東部プラチンブリー県ブラジャンタカーム郡のタンボン自治体による「まちづくり」の比較に焦点が当てられた。

成果：A・Bゼミ生の研究テーマであるタイ農村女性の役割には、農村地域で活動が展開されている様々な女性組織による「まちづくり」や生計向上活動も含まれます。そのため、本講演によって、様々な女性組織に聞き取りをブラジャンタカーム郡で実施する前段階で、自治体による支援の側からこれらの活動を理解し、概観を掴むことができました。さらに、「まちづくり」と自治体の役割というテーマでどのような国際協力が行なわれたのかという現場の話と経験談をうかがうこともでき、国際協力への理解を深めることもできました。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年9月2日(月)

講演者：Warangkana Rattananarat 氏、Thanapol Kheolamai 氏、Kunsuree Yimsaree 氏 (RECOFTC)

演 題：Empowering Women through Forest Management in Rural Thailand

実施都市：バンコク（タイ）

実施施設：RECOFTC 会議室

実施内容：まず、RECOFTC が東南アジア地域などでこれまでに行なってきた森林管理や気候変動への取り組みについて概要説明がされた。次に、コミュニティによる森林管理における女性の役割や参加の重要性について、具体例を挙げながら説明がなされた。さらに、現在実施中の WOW CCs (Women Overcoming the World's Climate Crisis with STEM) プロジェクトが紹介され、同プロジェクトにおける女性参加の内容やコミュニティ内での女性のリーダーシップが森林の持続的な管理に重要な役割を果たしている事例が示された。

成果：地域の森林資源の利用管理と女性の関係を理解し、森林資源管理において女性が果たす重要性を理解することは、地域社会、特に森林資源に依存しているタイ農村における女性の地位や役割を具体的にそして深く理解することにつながりました。

<諸活動の写真>



A ゼミ生二十歳のお祝い会



Dr. Sirikan (CMU) による双方向形式の講演



WMP での聞き取り調査



Ms. Weena (AJWS) の聞き取り調査



APSW にて



RECOFTC での Mr. Thanapol による講演



RECOFTC 講演での質疑応答



RECOFTC 講演後の講師と一緒に



Dong Bang 手織物グループの聞き取り調査



Dong Bang 有機農業グループの踏査



Dong Bang タンボン自治体での歓迎会にて



Pho Ngam タンボンの高齢者学校にて



Pho Ngam・ヤーン村貯蓄組合での
聞き取り調査

(6) 中村 俊之 (全学連携教育機構・客員教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

変わりゆく世界と新たな国際協力のありかた

<授業の概要>

途上国が直面する諸課題は近年ますます複雑化・グローバル化しつつあり、途上国のみの課題として解決することが困難になっています。環境問題等に代表されるグローバルな課題の解決に際しては、国を超えて解決策を見出す必要があります。また、途上国の抱える課題と日本の地域社会が抱える課題の解決を互いの共通点や相違点を見出すことによって、双方向での学びを深め、解決に導いていく可能性も検討され始めています。

本ゼミでは国際協力の基本的な考え方や課題を学びつつ、これまでの一方向的な「開発援助」ではなく、受益者のオーナーシップを重視した双方向の「開発協力」の優位性について理解を深め、新しい国際協力のありかたについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

当ゼミでは導入として世界の実情を客観的なデータに基づき俯瞰することの重要性を理解することから開始しました。学生のもつ先入観がいかにグローバル・サウスの国々の実情を正しく理解することの妨げになっているかを認識し、ファクトに基づき当該国・地域を把握することの難しさと重要性の理解に努めました。また、国際協力と開発協力の歴史、日本のODAの仕組みとその実施の考え方の根幹となる「開発協力大綱」の理解を深めるためにグループごとの発表を行いました。夏休みのゼミのフィールド調査を横瀬町で行うことに決めて、それにむけた課題発見から課題解決に導く手法の1つとしてPDM (Project Design Matrix) 手法を理解し、使用できるレベルに到達することを前期の目標に定めました。同手法を机上で学んだ後、架空の国・地域における課題の特定と解決するためのプロジェクトの立案をチームごとに行いました。その際に必要となるコミュニケーションスキルの向上についても実践形式で行って行きました。同時にフィールドとなる横瀬町についての理解を深めるべく、チームごとに町の実情についての文献調査を行うなど、現地調査の準備を行いました。また、前期終盤に JICA 若手職員でありながらアフリカの若者ととともに課題解決を行うためのプラットフォームづくりに励む職員の講演を実施し、ゼミ生が国際協力分野での将来のキャリアについて考える機会も提供しました。当ゼミではアフリカ地域に関心をもつ学生が多いことから、アフリカ地域全般の課題や可能性についても講義形式で学んでもらう機会を提供しました。次年度はアフリカについてより詳細に学ぶ機会を提供する予定です。

夏休みは後述のとおり横瀬町での現地調査を実施し、後期は主に調査結果のとりまとめを中心にゼミを実施しました。また、JICA 横浜での見学調査及びアフリカからの留学生インターンを多く受け入れ、ビジネスでのグローバル・サウスの課題解決に挑んでいる民間企業の若手経営者からの講演とその後のアフリカ留学生との意見交換を行いました。調査結果のとりまとめに際しては、PDM 手法を用いて、「問題分析」「関係者分析」「目的分析」、さらには課題解決のための「プロジェクトの選定」という国際協力プロジェクトを組成していく際に実際に用いる手法をチームごとに進め、途中段階でチーム間での議論も交えながら、より精度の高いものにするプロセスを行いました。アイデアをより実効性の高いものにするために必要な要素、具体的には予算、人員、主体となる住民の理解などの必要性の理解に努めました。なお、成果発表会の前には、JICA 職員及び横瀬町職員に対するゼミ生からのプレゼンを実施し、実践的なコメントやアドバイスをいただき、発表資料のブラッシュアップを行い、成果発表会に臨みました。

当ゼミでは国際協力において最も重要な考え方の1つである「オーナーシップ」と「パートナーシップ」を体現することを目指しています。ゼミ発足当初は初めて顔を会わす学生同士ということもあり、教室以外でのコミュニケーションがほとんど行われていませんでしたが、課題などの協働作業を通じて少しずつゼミ生同士の議論が活発となり、ゼミ長他の

役職などもゼミ生が自主的に設けて、徐々にゼミ生が自律的にゼミを運営する体制が整ってきました。この春休みにも来年度の海外現地調査に向けた渡航候補国の絞り込みや派遣時期の検討を行うために2日間の自主ゼミを開催し、次年度以降の準備計画や輪読の予定などを検討するなど、ゼミ生のオーナーシップが高まっています。来年度はゼミ生がより主体的にゼミ活動を運営するとともに、新2年生への指導的な役割にも期待しています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2024年8月7日(水)～2024年8月9日(金)

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町役場・他

実施内容：前期の文献調査を補足するため、町長はじめ町役場関係者、班ごとの関係先へのヒアリング、BBQ などを通じた町民との交流を実施しました。こうした活動を通じて調査結果の拡充を図りました。

成果：町役場では町長、副町長などとの意見交換を行うとともに、担当者から開発計画の概要についての講義をいただきました。また、町が職員と町民などに向けて実施した「ウェルネス」のセミナーにも参加させていただく機会を得て、町の職員などと協働作業を行い、成果発表を行うなど貴重な機会を得ることができました。2日目には3チームに分かれて、観光農園、観光協会、道の駅など様々な関係者から貴重なお話をいただくことができました。滞在期間中は単なる「お客様」にならないように、町の清掃活動や農園の手伝いなど、貴重な経験を得ることができました。また、一部ゼミ生が秋に自主的に横瀬町を訪問し、伝統文化の関係者にヒアリングを行うなど積極的な姿勢を示すなど、主体的に成果品の質を向上させる取り組みを継続しました。当ゼミでは最終成果品として「デジタル・デトックス in 横瀬」「横瀬町短期滞在プログラム」「マラソン・ウォーキング・フォト大会」の3つのプロジェクトを提案しました。

なお、3月19日にはゼミ生が横瀬町を訪問し、横瀬町町長、副町長、職員の皆さんに直接現地調査のお礼と成果の報告を行う機会をいただきました。今後も、ゼミ生が国内の地方基礎自治体を訪問することにより、町が目指す「関係人口」の増加にも寄与することが期待されます。

今回横瀬町では課題解決の方法としてのプロジェクト提案を実施しましたが、3年次では国内での課題を踏まえて、途上国での課題との共通性、日本と当該地域・国との間でウィン・ウィンとなる解決策を考えていきます。

対象演習：A・C

実施日：2024年11月1日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター

実施内容：横浜センターにおける業務概要の講義、「海外移住資料館」のガイド付き見学

成果：横浜センター担当者からはODA、JICA事業の概要、ODA実施の意義などについてコンパクトな講義を受け、国際協力全般に関する知識を深めることができました。また、「海外移住資料館」の見学では、かつて日本から北米、中南米に移住した日本人の足跡と苦難に満ちた歴史をたどり、同時に現在、日本に技術習得や研修のために来日している外国人の困難な日常にも思いをはせる機会となりました。日本国内の人口減、少子高齢化の現状と将来の人口構成を踏まえると、日本の経済活動を持続するうえでも途上国からの労働者の流入は不可避であり、国内で多様な文化に対する寛容性を高め、多文化共生を推進する必要性が高まっていることに対し、ゼミ生が深く考える機会となりました。

対象演習：A・C

実施日：2024年11月1日(金)

講演者：野呂 浩良 氏 (株式会社 DIVIC)

演 題：途上国におけるビジネスの魅力と課題

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：独立行政法人国際協力機構 (JICA) 横浜センター会議室

実施内容：野呂氏による講演と Q&A、同社でインターンを実施中のアフリカ各国からの留学生との対話

成 果：野呂氏からの講演ではこれまでのいわゆる途上国における課題解決に資する公的資金による援助、協力ではなく、課題解決をビジネスとして実施するという新たな視点について、創業者自らの経験を踏まえた講義を受けました。ゼミ生は将来のキャリアとして、国際協力の実施機関に就職するのみならず、民間企業でのビジネスを通じて途上国の課題解決を行うという新しい選択肢を知る良い機会を得ることができました。野呂氏がこうした考えに至った経緯や現在抱えている困難さなど、ゼミ生も積極的に質問して理解を深めることができました。近年、若年層を中心に、社会企業家が活躍し始めており、ゼミ生が将来、途上国の課題解決に資する手段の1つとしてのビジネスを念頭に置いてもらうことができれば、キャリアの可能性が広がることが期待できます。

その後、アフリカ数か国からの留学生との意見交換を実施しました。留学生の一人が体験したテロ組織による収奪といった衝撃的な話、将来の夢など、いずれの話もゼミ生が途上国の課題、経済格差などを考えていくうえで、とても参考になる話だったと思います。また、ゼミ生の何人かはコミュニケーションを図るツールとして、さらに英語力を高める必要性を痛感したことも成果の1つであったと考えます。

今後のゼミ活動でもできる限り途上国の若者世代との交流の機会を増やしていきたいと考えています。

対象演習：A・C

実施日：2025年3月19日(水)

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町役場

実施内容：横瀬町長、副町長、担当課長等に向けての成果発表

成 果：横瀬町での現地調査を踏まえた町活性化に向けたプロジェクト4件の概要を発表し、それぞれについて質問・コメントをもらいました。町長以下町の職員は学生の発表に対し、熱心に耳を傾けてくださり、実際に町の行政に携わる方々の視点から鋭い質問とコメントをいただきました。学生にとっては町の課題解決に向けた提案を実現するためのハードルなどについて多くの気づきが得られたものと考えます。なお、その場で町長から「若者ならではの斬新できらりと光るアイデアもあり、小さなことでもよいから実際に横瀬にきて何か始めてみるのはどうか」と勇気づけられるコメントいただきました。

なお、帰京後に町にお礼のメールを送付したところ、副町長から「ぜひ、町役場でもう少し広めに成果を披露してもらい、具体的なアクションを起こしてもらいたい」との言葉もいただき、ゼミで議論した結果、いただいた多くのコメントを踏まえた修正案をもって秋口に再度現地プレゼンの機会をいただこうという話し合いを進めているところです。

FLP演習C

<テーマ>

変わりゆく世界と新たな国際協力のありかた

<授業の概要>

途上国が直面する諸課題は近年ますます複雑化・グローバル化しつつあり、途上国のみの課題として解決することが困難になっています。環境問題等に代表されるグローバルな課題の解決に際しては、国を超えて解決策を見出す必要があります。また、途上国の抱える課題と日本の地域社会が抱える課題の解決を互いの共通点や相違点を見出すことによって、双方向での学びを深め、解決に導いていく可能性も検討され始めています。

本ゼミでは国際協力の基本的な考え方や課題を学びつつ、これまでの一方向的な「開発援助」ではなく、受益者のオーナーシップを重視した双方向の「開発協力」の優位性について理解を深め、新しい国際協力のありかたについて一緒に考えていきます。

演習Cでは、テキスト「開発経済学入門」等を使い開発の理論的な構造を学習するとともに、引き続き演習Bで実施した自主的取り組みである輪読を継続します。また、演習Aと合同で実施予定のゲストスピーカーとの対話などを通じて日本の地域課題と途上国地域における課題の共通点や相違点を学ぶ機会等も提供する予定です。

最後に、これまでの成果を踏まえゼミの総仕上げとして期末成果報告会/リサーチペーパー作成に向けて調査研究を実施します。

(状況によっては個人テーマの発表も可とする。)

<活動内容>

当ゼミではA、Bゼミですでに国際協力の基礎的な知識の習得が終了していること、Bゼミで海外現地調査を終了していることを踏まえつつ、最終学年でゼミ生が何を学びたいか、何を優先的に体験したいか、についてディスカッションすることから始めました。その結果、当ゼミ生はコロナ禍もあり、国内現地調査を行った経験がないことから、Cゼミでも国内現地調査を行うこととしました。その際、ゼミ生が3名と限られていることもあるので、国内現地調査についてはAゼミと合同で行えるところは合同で行い、成果についてはCゼミとして取りまとめることになりました。ゼミ前半ではA、Bゼミでの復習と補足の意味も込めて、国際協力と開発協力の歴史、日本のODAの仕組みとその実施の考え方の根幹となる「開発協力大綱」の理解を深めるための講義を実施しました。輪読についても、後期までにゼミ生主導で終了することができました。また、夏休みのゼミのフィールド調査を横瀬町で行うことを決めて、それにむけた課題発見から課題解決に導く手法の1つとしてPDM (Project Design Matrix) 手法を理解し、使用できるところまでを達成目標に定めました。同手法を机上で学んだ後、架空の国・地域における課題の特定と解決するためのプロジェクトの立案を行いました。その際に必要となるコミュニケーションスキルの向上についても実戦形式で行っていました。また、同時にフィールドとなる横瀬町についての理解を深めるべく、文献調査を行うなど、現地調査の準備を行いました。また、前期終盤にJICA若手職員でありながらアフリカの若者ととともに課題解決を行うためのプラットフォームづくりに励む職員の講演を実施し、国際協力分野での将来のキャリアについて考える機会も提供しました。

夏休みは後述のとおり横瀬町での現地調査を実施し、後期は主に調査結果のとりまとめを中心にゼミを実施しました。また、JICA 横浜での見学調査及びアフリカからの留学生インターンを多く受け入れ、ビジネスでのグローバル・サウスの課題解決に挑んでいる民間企業の若手経営者からの講演とその後のアフリカ留学生との意見交換を実施しました。調査結果のとりまとめに際しては、PDM手法を用いて、「問題分析」「関係者分析」「目的分析」、さらには課題解決のための「プロジェクトの選定」という国際協力プロジェクトを組成していく際に実際に用いる手法で進め、より精度の高いものにするプロセスを行いました。アイデアをより実効性の高いものにするために必要な要素、具体的には予算、人員、主体となる住民の理解などの必要性の理解に努めました。また、成果発表会の前には、JICA職員及び横瀬町職

員に対するゼミ生からのプレゼンを実施し、実践的なコメントやアドバイスをいただき、発表資料のブラッシュアップを行い、成果発表会に臨みました。

なお、横瀬町における現地調査は A ゼミと合同で行いましたが、C 生が海外現地調査の経験に基づき、柔軟な対応につき提案しつつ、A 生をリードしました。現地では予定どおりに計画が進まないことが多く、状況に応じて臨機応変に日程変更を行うなど、限られた時間の中で調査を進める必要があります。この点は A 生にとっても大いに学ぶ点があったと考えます。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2024 年 8 月 7 日(水)～2024 年 8 月 9 日(金)

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町役場・他

実施内容：前期の文献調査を補足するため、町長はじめ町役場関係者、班ごとの関係先へのヒアリング、BBQ などを通じた町民との交流を実施しました。こうした活動を通じて調査結果の拡充を図りました。

成果：町役場では町長、副町長などとの意見交換を行うとともに、担当者から開発計画の概要についての講義をいただきました。また、町が職員と町民などに向けて実施した「ウェルネス」のセミナーにも参加させていただく機会を得て、町の職員などと協働作業を行い、成果発表を行うなど貴重な機会を得ることができました。2 日目には 3 チームに分かれて、観光農園、観光協会、道の駅など様々な関係者から貴重なお話をいただくことができました。滞在期間中は単なる「お客様」にならないように、町の清掃活動や農園の手伝いなど、貴重な経験を得ることができました。また、一部ゼミ生が秋に自主的に横瀬町を訪問し、伝統文化の関係者にヒアリングを行うなど積極的な姿勢を示すなど、主体的に成果品の質を向上させる取り組みを継続しました。

なお、3 月 19 日にはゼミ生が横瀬町を訪問し、横瀬町町長、副町長、職員の皆さんに直接現地調査のお礼と成果の報告を行う機会をいただきました。今後も、ゼミ生が国内の地方基礎自治体を訪問することにより、町が目指す「関係人口」の増加にも寄与することが期待されます。

今回 C ゼミは横瀬町では課題解決の方法として「横瀬町におけるビジネスコンテストの実施」をプロジェクトとして提案しました。

対象演習：A・C

実施日：2024 年 11 月 1 日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター

実施内容：横浜センターにおける業務概要の講義、「海外移住資料館」のガイド付き見学

成果：横浜センター担当者からは ODA、JICA 事業の概要、ODA 実施の意義などについてコンパクトな講義を受け、国際協力全般に関する知識を深めることができました。また、「海外移住資料館」の見学では、かつて日本から北米、中南米に移住した日本人の足跡と苦難に満ちた歴史をたどり、同時に現在、日本に技術習得や研修のために来日している外国人の困難な日常にも思いをはせる機会となりました。日本国内の人口減、少子高齢化の現状と将来の人口構成を踏まえると、日本の経済活動を持続するうえでも途上国からの労働者の流入は不可避であり、国内で多様な文化に対する寛容性を高め、多文化共生を推進する必要性が高まっていることに対し、ゼミ生が深く考える機会となりました。

対象演習：A・C

実施日：2024年11月1日(金)

講演者：野呂 浩良 氏 (株式会社 DIVIC)

演 題：途上国におけるビジネスの魅力と課題

実施都市：神奈川県横浜市

実施施設：独立行政法人国際協力機構 (JICA) 横浜センター会議室

実施内容：野呂氏による講演と Q&A、同社でインターンを実施中のアフリカ各国からの留学生との対話

成 果：野呂氏からの講演では、これまでのいわゆる途上国における課題解決に資する公的資金による援助、協力ではなく、課題解決をビジネスとして実施するという新たな視点について、創業者自らの経験を踏まえた講義を受けました。ゼミ生は将来のキャリアとして、国際協力の実施機関に就職するのみならず、民間企業でのビジネスを通じて途上国の課題解決を行うという新しい選択肢を知る良い機会を得ることができました。野呂氏がこうした考えに至った経緯や現在抱えている困難さなど、ゼミ生も積極的に質問して理解を深めることができました。近年、若年層を中心に、社会企業家が活躍し始めており、ゼミ生が将来、途上国の課題解決に資する手段の1つとしてのビジネスを念頭に置いてもらうことができれば、キャリアの可能性が広がることが期待できます。

その後、アフリカ数か国からの留学生との意見交換を実施しました。留学生の一人が体験したテロ組織による収奪といった衝撃的な話、将来の夢など、いずれの話もゼミ生が途上国の課題、経済格差などを考えていくうえで、とても参考になる話だったと思います。また、ゼミ生の何人かはコミュニケーションを図るツールとして、さらに英語力を高める必要を痛感したことも成果の1つであったと考えます。

対象演習：A・C

実施日：2025年3月19日(水)

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町役場

実施内容：横瀬町長、副町長、担当課長等に向けての成果発表

成 果：横瀬町での現地調査を踏まえた町活性化に向けたプロジェクト4件の概要を発表し、それぞれについて質問・コメントをもらいました。町長以下町の職員は学生の発表に対し、熱心に耳を傾けてくださり、実際に町の行政に携わる方々の視点から鋭い質問とコメントをいただきました。学生にとっては町の課題解決に向けた提案を実現するためのハードルなどについて多くの気づきが得られたものと考えます。なお、その場で町長から「若者ならではの斬新できらりと光るアイデアもあり、小さなことでもよいから実際に横瀬にきて何か始めてみるのはどうか」と勇気づけられるコメントいただきました。

なお、帰京後に町にお礼のメールを送付したところ、副町長から「ぜひ、町役場でもう少し広めに成果を披露してもらい、具体的なアクションを起こしてもらいたい」との言葉もいただき、ゼミで議論した結果、いただいた多くのコメントを踏まえた修正案をもって秋口に再度現地プレゼンの機会をいただこうという話し合いを進めているところです。

(AC 合同 横瀬町現地調査) 2024 年 8 月 7 日(水)～2024 年 8 月 9 日(金)実施



(AC 合同 有識者講演とアフリカ留学生との意見交換) 2024 年 11 月 1 日(金)実施



(7) 戸川 正人 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

日本の国際協力の現状と課題

<授業の概要>

国際社会においては、地政学的対立が深刻化し、持続可能な開発目標（SDGs）など国際的な協力による開発課題の進展への期待も揺れ動いています。2023 年に改定された「開発協力大綱」を踏まえ、複合的危機を克服し、地球規模課題に対応し、人間の安全保障をまもるためにも国際協力の重要性がこれまで以上に高まっているといえます。また、国内の経済・財政状況が厳しくなると、政府開発援助（ODA）に対する視線が厳しくなることから、日本の国際協力は、効果をあげているのか、また課題は何か、など理解する必要があります。

日本の国際協力は、日本国内の知見を踏まえて実施されることから、質の高い国際協力を実施するためには、日本国内の現状と課題を理解し、国際協力の実施が日本の地方創生にもつながる好循環を目指す必要があります。しかし、日本と開発途上国の連携や共創は、実際には容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発の場を事例として、日本の国際協力の現状と課題を理解し、持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

戸川ゼミ（FLP 演習 B）では、ラオスで海外調査を実施することを軸に活動を行った。成果発表から逆算し、文書作成・論文執筆要領に加え、JICA 事業の概要やラオスでの JICA 事業概要を学習した。

ラオスについての理解の幅を広げるべく、5 月に代々木公園で開催された「ラオスフェスティバル」を訪問し、ラオスの専門家（JICA が実施している日本センタープロジェクト）からラオスの事情などをヒアリングするとともに、帰国隊員や NGO 関係者のブースにおいて情報を収集した。

ラオスでの海外調査後は、後述するとおり当初のテーマから変更することになったものの、開発途上国の現状と課題を知ることには大きな意義があった。実際に、現場を見て、現地に住む人から話を聞くことは、文献調査ではわからない現地調査の醍醐味といえる。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2024 年 9 月 7 日（土）～2024 年 9 月 15 日（日）

実施都市：ビエンチャン・ルアンパバーン（ラオス）

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）ラオス事務所、JICA 日本センタープロジェクト、水道事業運営管理向上プロジェクト、法整備整備支援プロジェクト、内務省（大臣表敬）、ルアンパバーン情報文化観光局（副局長面談）・他

実施内容：JICA 事務所において JICA の事業概要の説明を受けるとともに、実際に JICA が実施する技術協力プロジェクト（日本センタープロジェクト、水道事業運営管理向上プロジェクト、法整備整備支援プロジェクト）を訪問し、専門家やラオスの関係者から事業の成果と課題について説明をいただいた。ルアンパバーンでは、同県情報文化観光局副局長から事前に送付してあった質問票についての説明を受けた。台風の影響で海外協力隊の活動現場を訪問することはできなかったが、海外協力隊員との面談は行うことができ、現地での活動についての理解を深めた。また、海外協力隊経験者（現地に在住）からラオスの教育事情についてヒアリングをする機会があり、ラオス国立大学（ラオスで最も権威ある大学）の応募者が年々減少傾向にあり、その原因が大学教育を受けるインセンティブの低下（大学

卒でなくても、早めにタイに出稼ぎに行く方が生涯賃金をはるかに多くなる) によるものと聞き、少なからず衝撃を受けた。そのため、教育分野における日本の ODA のあり方にも再考の余地があるとの認識を得るに至った。その一方で、法整備支援分野においては、課題はあるもののラオスの現状を踏まえた協力を継続していることから、成功の要因を探るべくさらに深く考察をする必要があるとの認識に至った。

この他、教員がかつて JICA 事務所に勤めていた時代に懇意にしていた当時のラオス青年同盟総裁が、内務大臣に昇進していたため、表敬訪問を実施した。

成 果：当初は、観光開発分野において、学生の視点で「いかにラオスの観光開発を促進することができるか」というテーマを想定し、準備をしていたが、現地で高等教育に対するインセンティブがないとの説明を複数の関係者から受け、高等教育に対する価値観が日本や他の先進国と大いに異なることを知り、衝撃を受けた。併せて、日本の ODA のあり方も再考する余地があると考えたため、テーマを「日本からの支援のあり方」へ変更し、教育分野とともに支援が比較的順調に推移していると考えられる法整備支援分野を調査対象とした。

日本のラオスに対する法整備支援は、自助努力を促すものであり、日本の支援が終わった後にも自らの力で適正な法を運用できるようになることを目指している。実際に、ラオスの法曹界人材とともにラオスの実情を踏まえて、国家の基本法に関わる重要文献（「民法典逐条解説書」「民事判決書マニュアル」「事実認定問題集（民事）」「事実認定問題集（刑事）」「刑法総論教科書」）が整備された。

教育分野においては、概ね適切な支援が行われてきたと考えるが、高等教育に対するインセンティブがないという説明を受けてからは、日本の支援にも微かな「綻び」があるように感じ、それを深く考察することにした。極論ではあるが、教育分野において「現場主義」が徹底されていない可能性があると感じた。ラオスの現状を深く正しく理解する努力を怠らず、実態に基づいた現場主義重視の援助の徹底（教育に対する価値観の違いの点検も含む。）や国際社会への迎合、日本の国益重視への偏重など、援助の目的を点検・再考することが重要であると考えに至った。ラオスの教育分野への支援のあり方を入り口として、引き続き日本の ODA のあり方について考察を深めていく。

FLP 演習 C

<テーマ>

日本の国際協力の現状と課題

<授業の概要>

国際社会においては、地政学的対立が深刻化し、持続可能な開発目標（SDGs）など国際的な協力による開発課題の進展への期待も揺れ動いています。2023 年に改定された「開発協力大綱」を踏まえ、複合的危機を克服し、地球規模課題に対応し、人間の安全保障をまもるためにも国際協力の重要性がこれまで以上に高まっているといえます。また、国内の経済・財政状況が厳しくなると、政府開発援助（ODA）に対する視線が厳しくなることから、日本の国際協力は、効果をあげているのか、また課題は何か、など理解する必要があります。

日本の国際協力は、日本国内の知見を踏まえて実施されることから、質の高い国際協力を実施するためには、日本国内の現状と課題を理解し、国際協力の実施が日本の地方創生にもつながる好循環を目指す必要があります。しかし、日本と開発途上国の連携や共創は、実際には容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発の場を事例として、日本の国際協力の現状と課題を理解し、持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

戸川ゼミ（FLP 演習 C）は、2023 年に実施したカンボジア海外調査での成果を基に、各人が論文を執筆することを主として活動を行った。論文のテーマは「カンボジア総選挙における『無効票』とその地域差」「東南アジアにおける『麻薬戦争』と代替治療と代替開発の有効性について」「途上国における学習到達度調査 PISA の妥当性について」「カンボジアにおける私塾の流行から考える公教育の問題点」「カンボジア港湾開発のゆくえ」「経済発展最大化を目的としたサステナブルツーリズム」と極めて多様であった。教員の専門分野・地域とは必ずしも一致しないテーマもあったが、学生とともに文献等を調査し、議論をして、内容の精緻化を図った。学生が、関心のある分野について自発的に調査し、考察を深め、それを教員と議論する過程は、今後社会で活躍するための重要な機会となった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2024 年 11 月 8 日（金）

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：独立行政法人国際協力機構（JICA）横浜センター海外移住資料館

実施内容：JICA 横浜海外移住資料館において、移住の歴史や現代の日系社会についての理解を深める。

成果：海外日系人協会の担当者のガイドにより、単なる視察にとどまらず移住の歴史や日系人社会にについて深く理解をすることができた。さらには、こうした移住の歴史等を知ることにより、多文化共生についても理解を深めることができた。

JICA 横浜海外移住資料館は、北中南米への日本人移住の歴史と日系人の暮らしを紹介するため、2002 年に開館した。同資料館は、海外移住の起点となったハワイを含む北米と、JICA が戦後、移住事業の一翼を担った中南米の国々を主たる対象とし、海外移住に関する歴史的な資料を展示している。国境をまたぐ人の移動が当たり前となった現代では、様々なルーツを持つ人がともに暮らしているが、多文化共生社会の実現が一層求められる中、かつて移住先で互いの文化を尊重し、共存・共栄を目指した先達や、世界で活躍する日系人の姿は非常に示唆に富んでいると感じた。

日本における海外移住の歴史を 5 期に分け、年表、文献、写真、映像によっ

て各時代の重要な出来事を示されていた。世界移住マップ、都道府県別の移住者数をあらわした立体地図、ハワイの官約移民や書生、ブラジルのアリアンサ移住地、最後の移民船「にっぽん丸」などのトピックスを取り上げたコーナーもあった。

また、「われら新世界に参加す」のコーナーでは、「なぜ海外に行ったか」「どんな仕事についたか」「どのように暮らしていたか」といった、6つの問いかけを一緒に考えるために、呼びかけのポスターや移住の手引、農機具や看板、食器棚やごちそうテーブルの再現といった、物品が中心として展示されていた。移住者たちは新世界での生活を通じ、そこでの新たな文明づくりに参加し、貢献してきた。大型映像や移住地の模型、標本資料などで、移住の背景、道のり、仕事や暮らし、コミュニティ形成についてわかりやすく紹介されていた。

ブラジルを例に、移住者を取り巻く環境の変化等について解説されており、多様化する日系人や日系社会について、海外の日系博物館の館長インタビュー、国内で活躍する日系人のインタビュー等を交えて紹介されており、非常に興味深かった。

最近では海外からの移民や外国人労働者などのニュースを耳にすることは多いが、歴史的には日本から中南米等に移住をする時代があったことは、あまり認識されていない。日本の移住の歴史を紐解き、理解をすることにより、そこから得られた教訓を日本の多文化共生の中で活かしていくことが求められるとの思いを強くした。